

消費行為の高度化の論理

鈴木 康 治

第一工業大学情報電子システム工学科 〒110-0005 東京都台東区上野 7-7-4

E-mail: ko.suzuki@ueno.daiichi-koudai.ac.jp

A Theoretical Inquiry into the Sophistication of Consumption Activities

SUZUKI Koji

Daiichi Institute of Technology, 100-0005 Ueno 7-7-4, Taito-ku, Tokyo

ko.suzuki@ueno.daiichi-koudai.ac.jp

Summary: The aim of this paper is to construct a common theoretical framework able to determine the degree of sophistication in consumption activity in itself. Consumption activities are apprehended in this paper as one of rational actions, which have a specific behavioral structure of the means-end relation. It is ascertained in this paper that consumption activities all come into the scope of consummatory action having an intended consummation, that is, consummatory rationality whether latently or manifestly, so that the attention to consummation in action brings a reasonable and valid ground to the ideal type of consumption. Also demonstrated is that the pursuit of stylization, or thinly goal-oriented mentality, should be a basic element of the consummatory action. Then it is concluded that the scale of how much stylized some consumption activity is offers a valid criterion for analyzing consumption in terms of sophistication. The same criterion exhibits a high effectiveness and helpfulness when comparing with each other not only a wide array of consumption activities but also more diversified contemporary consumer cultures, because it should get various consumption activities and consumer cultures dealt with in a comparable manner from the unified theoretical point of view of sophistication in consumption activity on its own.

Keywords: consumption, sophistication, consummatory rationality, pursuit of stylization

1. はじめに

消費の高度化についてはこれまで、資本主義社会の発展論や変容論の系論として現代社会の消費社会化の展開の主要な特徴を指摘する文脈において議論されることが多かった。代表的なものとしては、経済のサービス化、欲求の多様化、脱物質主義の消費文化などの議論が挙げられる。資本主義社会が変容していくにつ

れて、人びとの欲望の対象や消費様式も変容を被る中で、何らかの意味で高度とされる傾向性を顕在化させていくとされた。例えばそれは高級志向や品質志向やスローフードなどの消費者の趣味の奢侈化や洗練化として、あるいはまた環境配慮やフェアトレードなどの市民意識の高揚として論じられてきた。消費の高度化論は、こうした消費様式の通時的変化が消費文化とし

て一般的に定着していく過程を捉えた論理という性格を強く持っていたといえる。

本稿の課題は、行為論の文脈において消費の高度化の論理を再検討する作業を通じて、消費行為一般の論理を定式化し、消費行為それ自体の高度化の理論的枠組みを提示することである。今日の消費文化の分析に適合した1つの理論的枠組みを構築することがそのねらいである。多様な文化的要素が複雑に絡み合う今日の消費文化をめぐる状況においては確かに、それぞれの消費様式を構成する文化的要素の複合の特異性を同定することが重要となる。とはいえ、個々の消費様式の特異性をたんに把握するだけでは、消費文化理論の一般化という点において限定的な意義しか持たないことは明白である。特異性を理解すると同時に、多様な消費様式の間の差異の詳細を同一の尺度に照らして比較検討する作業もまた必要とされる。本稿は、消費の高度化論を消費文化理論の一般化のための規準として利用できるような道具立てにするための1つの試みである。

消費行為それ自体の高度化とは何か。それは行為類型として消費行為を見たときに見出せる固有の構造の洗練化すなわち純粋化ということである。それゆえ消費行為の高度化とはさしあたり、消費行為一般が具有する固有の構造を当該の消費がより明確な形で体現し、かつその典型的な構造をより純粋に保持している度合いが高くなることと定義することができる。では消費行為一般の固有の構造とは何であろうか。またそのいわず消費行為の理念型との近接性の度合いを判断するさいに準拠すべき基準とはどのようなものになるのであろうか。その判断のための基準軸を明確に規定することで、多様な消費行為を高度化という観点から比較することが可能となる。消費行為の高度化の度合いを議論することが可能となれば、特定の消費文化や消費行為の傾向性を高度化の尺度に照らして比較することができるようになる。そうした消費行為一般に関わる理論的枠組みの整備は、現実の様々な消費行為を高度化という統一的な観点からその進展や停頓といった側面を焦点化して批判的に論じる上で有用性を持つであろう。

本稿では消費行為に固有の構造を与える作用として行為の成就性という概念に注目する。そして行為の成

就性ということから、消費行為固有の構造として、様式性の追求と呼ぶことができる論理が導出されることを確認する。以下ではまず、行為の成就性とは何かについて考察し、その行為としての特徴を整理する¹⁾。次に、これまで展開されてきた成就的行為論の諸系譜を瞥見しつつ、そうした系譜の1つに消費論があることについて見ていく。具体的には、贈与論・浪費論・消尽論などに関する消費論的系譜の中に、消費行為の成就的側面に注目した議論の積み重ねがあることを確認する。その上で、それらの消費行為に共通する要素として、様式性の追求という消費行為固有の構造が見出せることを指摘する。消費行為固有の構造という観点からは、成就的行為としての消費が行為の合理性にまつわる一般的な理論枠組みの中に位置づけ可能であることを示す。結論として、消費行為の高度化の度合いを測る基準として、様式性の追求の度合いを用いることの妥当性を論証する。

2. 行為の成就性

行為を成就性という観点から捉えた場合、とくに重要となるのが完結性と規範性と反復性という3つの行為的特性である。これらの諸特性が相補的に作用することで、成就的な行為は固有の構造を備えた1つの類型としてその他の行為類型から弁別可能となるからである。表1は3つの行為的特性とそれらが行為に固有の構造を付与する作用をまとめたものである。

表1. 成就的行為の特性

完結性	空間と時間の限定性 目的の名目化／希薄化 日常生活からの隔離
規範性	厳格なルールの設定／適用 ルールへの相互的な服従 感情の制御 (受動性と能動性の均衡)
反復性	行為過程の定式化／洗練化／理想化 周期性 (リズム) の生成 再現や模倣による伝達可能性

出所：山崎 ([2003]2006) pp.28-38 より作成

まず行為の完結性とは、行為がなんらかの意味において生の全体性、つまりは現実世界や日常生活の全体

的な構造や連関から隔離されるということである。その結果、一連の行為の完了を可能にしている空間と時間とが限定性を有することで、それらの行為群は始まりと終わりとが明確な、全体性としての構造を備えた行為として分離され、その他の日常の諸活動との間に一定の境界が画されることとなる。こうした行為の完結性は種々の遊戯や社交の様式においてその構造が明瞭に示されることが多い。G.ジンメルは遊戯の本質について、「生命の形式が生命の実質によって規定される段階から、決定的な価値に高められた形式が生命の実質を規定する段階」(Simmel 1917=1979: 70-71)へと至る転回を遂げた行為であると述べている。ジンメルはまた、遊戯と芸術の行為としての類似性を指摘する中で、より簡潔に「生命のリアリティから生まれながら、このリアリティに対して独立の国を成す諸形式」(Simmel 1917=1979: 71)が遊戯や芸術であるとも論じている。ジンメルが指摘する生命過程からの独立という点は、当該の行為から目的志向という側面が削ぎ落とされていく契機となる。

次に行為の規範性という点については、作法を例にして考えてみると分かり易い。作法とはある特定の場面における行為を詳細に分節した上でそれを一定の手順や約束事を定めて再構成したものであると見ることができる。作法はときに煩瑣ともいえるほどに複雑な手続きとなることもある。しかも作法はたんにそうした一定の手順や手続きに従い振舞うことを人びとに要求するだけでなく、それを円滑にあたかも自然な習慣であるかのように遂行することを求めてくる。作法に従うことは、一定の手順や約束事を遵守するという点において、当該の行為に規範性を帯びさせる。なおかつそこには必ず他者の視線という社会性が混入することで、参加者同士の相互的なルールへの服従が成立する。成就的行為は人間関係や社会秩序の定式化を通じてその安定性を支える機能を持つといえる。

厳格なルールへの自発的な服従は、一般的に感情の抑制をその場の参加者全員にもたらすこととなる。なぜなら、感情に流されるという意味での行為に対する過度の受動性は、作法からの逸脱を招くからである。その一方で、過度の能動性も行為の成就性を棄損してしまう。それは行為の完了を急ぐあまりに、行為過程それ自体の簡略化を志向するようになるからである。

詰まるところ成就的行為とは、山崎が述べるように、受動性と能動性を精密に均衡させること、別言すれば、一連の行為の流れに乗りながら乗せられるといった両義的な態度を人びとに要請するものなのである(山崎 [2003]2006: 37)²⁾。

最後に、行為の反復性に関しては、再現という要素が重要となる。例えば、様々な遊戯にあつては、同じ条件の下で何度も繰り返し一定の試行が行われる。スポーツやギャンブルや演技では、参加者は繰り返しの試行の中で厳格なルールに従いながら、自己の行為様式の洗練を目指し、偶然性に身をゆだねる。

儀礼や社交においても事情は同じである。一定の行為は、特別な場面あるいは特別な時間間隔がめぐってくるたびに再現されなければならない、周期性というリズムが人びとの生活の中に作り出される。何度も繰り返されるうちに一定の行為過程は独自のリズムを生成し始める。リズムはやがて人びとの行為を規定するようになる。他方で人びとのほうでも、そうしたリズムを内面化し、自発的に自己の振舞いをそれに合わせようと努める。そして人びとの所作がなかば自然な動作としてリズムとの調和を実現したときに、成就的行為に特有の心地よさがもたらされることとなる。山崎は行為のリズムがその抽象化の度合いを高め、図式的な固定化が進展することの中に文明化の始まりを看取しようとしている。「一般化していえば、リズムの図式的な側面を抽象化して固定し、人間の行動から受動性を極限まで排除したとき、そこにはつねに文明化が始まるといえるだろう」(山崎 [2003]2006: 282)と述べ、文明化とは行動の観念的な制御であると結論づけている。行為はリズムを帯びるに伴って模倣の対象となっていく。模倣を通じて一定の行為は型として錬成されていく中で、その様式性を堅固に確立していく³⁾。堅固な様式性を備えた行為は、さらに一般性や普遍性を持つものとして定式化されることで伝達可能なものとなり、文明の諸制度として広く普及していくこととなる。それは一面では行為としての形骸化を招くであろうが、その抽象性ゆえに一般的な秩序の形成を社会にもたらすことにもなる。

3. 成就的行為論の系譜

行為の成就性という問題は、複数の学問領域に関わ

るものであり、かつ広範な主題との関連を有するものである。実際、多くの学問において成就的行為の問題は取り上げられてきた。表2は成就的行為論の主な系譜を整理したものである。それぞれの系譜の問題関心は相互に重なり合いながら密接な関連性を有しつつ、社会学や文化人類学や芸術学などの領域を横断するいくつかの大きな主題を構成している。

表2. 成就的行為論の系譜

主題	トピック	系譜
遊戯	スポーツ	シラー
	芸術・学問	ホイジンガ
	ギャンブル	カイヨワ etc.
儀礼・儀式	宗教	デュルケム
	象徴	ヘネップ
	分類・認識	ダグラス etc.
社交	会話	ジンメル
	作法	エリアス
	文明	山崎 etc.
消費	贈与	モース
	浪費	ヴェブレン
	消尽	バタイユ etc.

出所：筆者作成

遊戯論の系譜はよく知られている。F.シラーの美学に関する論考にその萌芽が見られ、J.ホイジンガがその主題を遊戯論としてより明確にかつ体系的に整理した。そのホイジンガの枠組みを下敷きにしてR.カイヨワが遊びの文化的要素の一般化を展開したという思想的つながりである。行為の成就性とのつながりとしては、ホイジンガによる遊びの形式的特徴の分類がとくに重要である。自発性（自由な行動）・日常生活からの遊離（必要充足活動からの逸脱）・反復可能性（リズムとハーモニー）・完璧性（絶対的秩序）・完結性（時間と空間の限定）・審美性の追求（緊張と歓び）という特徴をホイジンガは列挙している

(Huizinga [1938]1958=1973: 28-37)。遊びに見られるこうした特徴は、まさに成就的行為そのものの特徴である⁴⁾。

儀礼や儀式についての研究においては、そうした

行為が社会の秩序維持の機能と関連することを強調する人類学的な系譜がある。この理論的系譜は行為の成就性を考える上で重要な理論的な接点を有する。例えばA.ヘネップが多くの儀礼には象徴的意味での通過という共通の要素が見出せることを指摘したことは有名である (Gennep 1909=[1977]2012: 23-24)。社会秩序やそれを支える世界観を安定的に維持していくためには、その秩序の中に各成員を適切に配置することが必要である。儀礼とは各人がライフサイクルを通じてその配置上の移行が起こるさいに、一時的な分離を経て、新たに社会秩序の中に再配置されるまでの過渡的な移行過程を象徴的に区切るための文化的装置である。それゆえ儀礼とは過渡期という完結性を持つがゆえに、その一連の行為過程には明確な始まりと終わりが規定されている。また多くの場合、人びとはその期間中は日常の生活空間からも物理的に隔離された環境で過ごすことを強いられる。通過儀礼の過程の中では一定の行為を行うことが厳格なルールとして定められている。この点で儀礼的行為は成就性を帯びることとなる。他方、E.デュルケムやM.ダグラスは、儀礼的行為とは当該社会が有する分類体系を行為として反映したものであることを強調する。デュルケムは「儀礼とは、人が聖物に対してどのように振舞うべきかを規定した行為の規準である」(Durkheim 1912=[1941]1975: 77(1))と述べ、社会秩序の反復的な確認という側面を儀礼的行為が有することを指摘している。また、ダグラスによれば、分類の作業とは環境に対する人びとの能動的な働きかけであり、合理的に環境を制御しようとする人類にとってきわめて普遍的な営為である。穢れや汚物とは無秩序の象徴であるとして、ダグラスは「我々が汚物を忌避するとき、そこには恐怖もしくは不合理なる要素は一切存在しない。それは創造的行動であり、形式を機能に関連させようとする試みであり、経験を統一しようとする試みである」(Douglas [1966]2002=[1972]2009: 34)と述べている。儀礼的行為にはこのように、環境や事物を合理的に組織化するという理想化された社会規範への志向性が伴うのであり、この点においてもやはりそれは形式や秩序の再現や再調整に関わる上で、自ずと成就性を帯びる論理を内包しているといつてよい。

社交論の系譜の濫觴としては、ジンメルの社会学方

法論を取り上げるのが妥当であろう。確かに、社交を主題とした理論的な考察は18世紀の啓蒙期においてすでに、コマース論や文明化論や道徳論といった近代的な社会秩序論に係わる文脈の中で多様に展開されていた⁵⁾。とはいえ、社交という人間の営為を独自の明確な構造を備えた行為領域としてその人間社会における位置づけを与え、ひいては近代社会批判につながる大きな論点として構成したのはジンメルが最初であった。成就的行為として社交を論じた系譜はジンメルに始まるとの主張の根拠はこの点にある。N.エリアスによる文明化の歴史に関する研究はその一面において、ジンメルのこうした社交論の問題意識を引き継ぐものであるといえる。フィギュレーションという概念に依拠しつつ個人と社会との相互規定的な関係性の作用として文明化を捉える試みにおいてエリアスは、作法の集積から礼節や礼儀が形成され、そうしたルールへの服従の一般化から文明が生じることを論じている。

(Elias 1969=1977-78(1): 50-52)。ジンメルやエリアスの議論を踏まえながら、他方ではホイジンガやカイヨワの遊戯論さらには世阿弥やR.G.コリングウッドの演技論などとの接続を目指しながら独自の社交論を展開しているのが山崎である。社交を遊戯や演技を包含する上位概念であると規定して、成就的行為一般としての社交論の枠組みを提示している。

消費行為にも成就的な側面が見出せることは、すでに従来の消費論の系譜においても断片的にはあるがしばしば指摘されてきた。消費行為の理念型的な構造を目的志向型の行為としてではなく、行為それ自体の過程に関心を集中させる行為として捉えようとしている点にそれらの議論の共通性が見出せる⁶⁾。消費行為のこうした側面はとくに、贈与・浪費・消尽などの主題との関わりにおいて言及されることが多かった。その代表的な議論として、M.モース・T.ヴェブレン・G.バタイユ・山崎などの名を挙げることができる。

モースは『贈与論』の中で、とくに近代以前の社会では、贈与交換が個人間の営為としてあるのではなく、集団間における多重的な意味合いを帯びた相互行為として行われていることを指摘した。そうした形態の贈与交換としての相互性を全体的給付体系とモースは呼ぶ。全体的給付として行われる交換においては、交換のたびにその結果として獲得される財やサービスとい

う経済的利得よりも、むしろそれ以上に、そうした相互性としての行為連関それ自体が適切な時期に一定の決められた手順に従って着実に実行されつつ1つの明確な様式を持った出来事として成就されることのほうに力点が置かれている。「彼らが交換するものは、専ら財産や富、動産や不動産といった経済的に役に立つ物だけではない。それは何よりもまず礼儀、饗宴、儀礼、軍事活動、婦人、子供、舞踊、祭礼、市であり、経済的取引は1つの項目に過ぎない。そこでの富の流通は、いっそう一般的で極めて永続的な契約の一部に過ぎない」(Mauss 1925=2009: 17)とモースは述べている。この点で、モースのいう全体的給付体系としての贈与交換とは、目的志向型の行為から構成されているわけではなく、一定の行為過程の完了ということ、さらには時間軸におけるその無限の反復性をも考慮しながら自己が参与している目の前の出来事の成就ということに細心の注意が向けられるような構造を備えた行為から構成されているといえることができる。

ヴェブレンが『有閑階級の理論』の中で顕示的閑暇や顕示的消費の概念を用いて批判したのが顕示的浪費の問題であることは旧聞に属することである。ヴェブレンは社交や礼節が人びとの間に相互的な羨望喚起のための競争を生じさせるのみで、生産的な活動からの疎隔を帰結することの社会的損失を批判している。しかし、逆にいえばそれは、ヴェブレンのテキストには消費行為というものが本来的に成就性を志向する論理を含むものであることが示唆されていると解釈することも可能である。先に見たように、行為の完結性や規範性とは、行為の成就性を構成する重要な要素である。浪費を批判し続けたヴェブレンではあるが、消費の顕示性の問題が社交や礼節などの行為と深く関わっていることの認識はヴェブレンにおいても共有されている(Veblen 1899=1998: 56-66)。ヴェブレンの用語法において、浪費や閑暇とはモノや時間の非生産的使用という意味である(Veblen 1899=1998: 56, 113-117)。ヴェブレンが消費を、何かを効率的に利用したり遂行したりするような行為の類型として捉えていないことはこうした用語法からも明らかである。この意味からすれば、ヴェブレンの顕示的閑暇や顕示的消費や顕示的浪費という概念は、より純粋な構造を備えた消費行為を捉えたものであるとの解釈も可能であろう。ヴェ

ブレンのテキストとは消費行為の成就的側面を先駆的に論じるものである。

バタイユも、消費行為の成就性を先駆的に論じた1人である。バタイユは浪費の問題を消尽の概念へと焦点化することで、消尽論を消費論の中心的テーマへと押し上げた⁷⁾。バタイユはW.ゾンバルトと同様、近代以前の社会において普遍的に見られた公共的な空間での豪華な浪費が、次第に個人的なものへと矮小化されていくことを指摘した (Bataille 1976=2003: 130, 132-136)。バタイユはそうした歴史的变化を指して、浪費の墮落と呼んでいる。バタイユはまた、供犠の本質を生への贈与と捉えた上で、それを典型的な浪費の類型として論じている。その供犠論において、浪費(消費)には成就性が伴うことの示唆が見られる。バタイユによれば、戦争も供犠も共に恐怖を呼び起こすことで人びとに恍惚をもたらす可能性を持っている。しかし戦争と供犠とはこの恐怖の扱い方が対照的であるという。戦争は恐怖に由来する恍惚を最小にしようとするのであるが、供犠は行為の目的を追求するための手段にこだわり、時間をかけて恐怖を引きのばし、供犠の行為過程それ自体の中に陶醉することを目指すものである (Bataille 1976=2003: 173-174)。供犠とはこの意味において、成就的な側面を有する行為類型である。

社交論・遊戯論・芸術論などの批判的検討の上に、独自の消費論の地平を山崎は切り開いた。山崎の消費論の目立った特色は、消費行為が成就性という構造を持つことの論理を多くの行為論的な主題を掘り下げて考察する作業を通じて、綿密な理路として構築している点にある。以下で見ると、山崎は『柔らかい個人主義の誕生』において、広く遊戯・礼節・社交などの主題を包摂しながら、消費固有の行為の構造を浮き彫りにしている。この点でそれは、消費行為理論の一般化に寄与するものとなっている。

4. 消費行為固有の構造

行為の完結性という側面は消費行為の観点からすると、消費対象の消耗という物理的な意味での目的性をいわば名目化することにつながる。消費者の関心はもはや行為の結果ではなく、結果へと至る行為過程それ自体の全体像へと向けられ、その関心はさらにはその過程を通じて行われる一連の動作ひとつひとつの細

部に対するこだわりという様式性の追求へと転換されることとなるからである。したがってそれは、充実した時間の消耗を志向する行為としての性質を消費に帯びさせ、欲望の引きのばし、すなわち満足の延期という作用を発揮することとなる (山崎 [1984]1987: 161-164)。こうした行為の完結性にまつわる様式性の追求の論理は、現代の消費がその購入対象である財の入手という目的の達成以上に、購入に至るまでの過程すなわちショッピングという体験や消費の舞台となる消費空間での充実した時間の過ごし方それ自体に対して目を向けていることを説明するものであろう⁸⁾。

P.ブルデューはハビトゥスや文化資本といった概念を用いて、趣味や作法や礼節を通じた消費様式の卓越性をめぐる競争として消費行為の規範性を論じている。他方でダグラスらは「消費とは、商取引も強制力も自由な人間関係に干渉しえないことを明示する規則によって守られた、一定の行動領域なのである」

(Douglas and Isherwood 1979=1984: 67) と述べている。消費行為の規範性に関するさらに先駆的なテキストとしては、M.ウェーバーによる社会的名誉をめぐる階層秩序の研究や先述のヴェブレンによる顕示的浪費の研究などが挙げられる。消費様式とはまずは一定の行為が行われる空間と時間の大枠を決定することを通じて適切と不適切とを判断するための文脈である社会的環境を設定する。そのようにして設定された環境の中でより細かな行為の手順を作法が指示するのである。この点において行為の規範性は完結性とも結びつきながら相補的に作用することで、様式性としての行為の輪郭を強固なものにする。

行為の反復性は社会秩序の安定性を維持強化する。それは当該社会の各成員の個別的行為の中に、公共的な価値を象徴として表出させる作用を持つからである。「我々個人にとって、日常の象徴的行為はいくつかの役割を果している。それは焦点を設定する仕組みとして、記憶の手段として、さらに、経験を支配するものとしても役立つのである」(Douglas [1966]2002=[1972]2009: 160) とダグラスは論じている。人びとは作法や儀礼など一定の行為の実践を通じていわば社会的な時間と空間の意味世界を再現しつつ、同時に、微妙な再調整を施すことでその秩序の再創造にも加担しているのである。消費においても、特定の

財の選択や組み合わせが反復されることで、財が帯びる象徴的意味が社会秩序や価値体系や人間関係の一貫性や伝達可能性がその消費行為を通じて繰り返し確認される。「財は中立的だが、財の使用は社会的である。財は垣根としても橋としても使われうるのである」

(Douglas and Isherwood 1979=1984: 13) との指摘の通りである。消費行為とはこの点において、抽象的で隠微的な象徴体系としての意味世界の安定性を、定型化された行為としてのリズムへの同調を通じて再現しつつ再創造するものであるということもできる。

このように見てくると、消費とは成就性の性質を帯び易い行為の構造を持っていることが分かる。成就性の性質を強く帯びる消費行為には当然に、消費という行為類型に固有の構造がより明瞭に備わることとなる。山崎の言い方を借りれば、それは欲望の引きのばしであると同時に、充実した時間の消耗であるという特殊な行為の構造である(山崎 [1984]1987: 167)。さらに、様式美を備えた行為連関の自発的制御という点をそこに追加することができる。これらは目的の希薄化、行為過程の定式化・理想化、感情の制御、ルールへの服従などの成就的行為の特性が消費行為において顕在化したものである。この特殊な構造を支える行為連関の洗練化・純粋化を追求していくことがすなわち消費行為の高度化であるということが出来る。それは目的志向型の行為からの漸層的な乖離という方向性をとらざるを得ず、そこからは手段それ自体としての行為過程に対する注視や細部に至るまで正確に再現することへのこだわり、さらには節度への配慮といった自制的な態度が生まれてくる。一方でそれはまた、財やサービスの非生産的使用という意味において、浪費や奢侈の要素とも結びつく。一定の行為過程についての人びとのそうした関心やこだわりはその必然的な帰結において、様式性の追求という方向へと向かうこととなる。行為の完了において目的の達成ということがほとんど重要な意味合いを持たないのであるから、その洗練化には現実世界的手段性という位置づけからの理想化としての逸脱を伴わざるを得ないからである。成就的行為はゆえに、ジンメルが指摘したように、手段-目的関係の行為連関が織りなす日常的生の無限の鎖環からの独立性を獲得することを目指すこととなる。

では、消費行為の成就性に注目した場合、消費行為

の高度化の論理をどのように規定すればよいのであろうか。以下では、成就合理性と呼ぶことができるある種の合理性の論理に注目することで、消費行為の高度化を生産行為との連続性において定義可能になることを示す。

消費はその行為の特性において、社交や遊戯や芸術活動など同型の構造を共有する。これらの成就的行為に見られるのは、目的と手段の転倒という構造である。手段それ自体あるいは行為過程それ自体に対する関心の優位であるといってもよい。作法にしても遊びにしても、さらには演技にしても行為の全体像を思念しつつ、その完了へと向かう一定の段取りを一連の身体的動作の継起として、ひとつひとつその場に見合ったやり方と時間使用とを適宜に即興的な動きの連続において実現していくという点では、それらの行為はすべて同型であるとみなせる。例えば、遊戯の本質が様式性の追求という点に見出せることをホイジンガが指摘している。「遊びは、何かイメージを心のなかで操ることから始まるのであり、つまり、現実を、いきいきと活動している生の各種の形式に置き換え、その置換作用によって一種現実の形象化を行ない、現実のイメージを生み出す」(Huizinga [1938]1958=1973: 22)。遊びの目的とは行為そのものの中にある。遊びを志向することは、行為そのものの様式性の追求を志向することと同義である。

遊戯が日常生活からの独立性をどの程度保つことができるかということは、ひとえに様式性の追求という点にかかっている。文化は遊びのなかに始まるとは有名なホイジンガの言葉であるが、文化とは現実の不完全な諸行為を理想化することで、その様式性の理念を追求することから生成されるということが出来る(Huizinga [1938]1958=1973: 165)。これが遊び、ひいては成就的行為一般が審美的な要素と強く結びつく理由でもある。美とは表現の様式性そのものだからである。文化的な活動は目的志向性を欠いているため、一個の行為としての成立基盤の強化は、美的なものすなわち様式性の追求に求めていくしかないのである。

様式性の追求という問題を消費において検討するための手がかりとして、生産と消費との概念的区分に関する山崎の議論を取り上げることが有益である。山崎は、消費行為固有の構造を生産との連続性において

位置づける中で、生産と消費との連続性を支える論理が行為の合理性という点に逢着することを確認する。それは消費行為を一貫して合理的な経済活動の枠組みと結びつけて論じる試みであるといえる。山崎の議論は、生産と消費とが経済行為という点においては共通の能動性を有するとの理解から出発する。行為としての共通の基盤を明示することで、生産と消費との比較を同じ基盤を共有する類型間の相違として浮き彫りにしていく。つまりは生産と消費とは、まったく異質の行為概念ということではなく、共通の基盤において同一の構造を備えつつ対極的な関係性を有している行為類型のことである⁹⁾。生産と消費とは、多様な混合形態の行為類型をその中間に挟みながら互いにそれぞれの典型的な行為的色彩の濃淡を漸層的に推移させる関係性にあるものとして思念されることとなる(山崎[1984]1987:167-168)⁹⁾。経済行為とは何かについてここでは詳述する余裕はないが、ひとまずその行為的特性を簡潔に述べるとすれば次のようになるであろう。すなわち経済行為とは、行為主体が手段・目的関係という思考の型に照らして意思決定を行う構造を備えた諸行為であると定義することができる。

表3. 手段・目的関係における3つの合理性

合理性の類型	志向性	行為の特徴
形式合理性 formal rationality	目的 志向	目的達成に向けた手段の効率性の追求
実質合理性 substantive rationality	手段・目的 志向	手段と目的との特殊な整合性の追求
成就合理性 consummatory rationality	手段 志向	手段的行為の審美性や完結性の追求

出所: Weber ([1922]1972=1979) pp.330-332 を元に作成

手段・目的関係という構造を持つ諸行為は、行為の合理性という問題と深く関連する。社会的行為の合理性については、周知のようにM.ウェーバーによる古典的な類型化の枠組みがある。表3はウェーバーの社会的行為の合理性の類型化図式を下敷きとしながら、その

枠組みの中に消費行為を包摂するように敷衍したものである。手段・目的関係をめぐる合理的行為の構造の中に消費固有の行為的特性の位置づけを示しつつ、生産と消費の関係性を漸層的に推移する行為の3類型として整理したものである。

3つの合理的行為の類型は、生産と消費を両極としながら、形式合理性→実質合理性→成就合理性の順に生産的性格を弱めながら消費的性格が強い行為へと移行していく。形式合理性の特徴は目的志向という点にある。目的の実現や達成を第一義的に考えるような行為類型である。生産とはまさに、目的の実現に向けて最適な手段を探求する側面を強く持つ活動である。実質合理性とは手段・目的志向とでもいえる行為類型である。ある目的の達成にこだわる志向性を持ちながらも、一方ではそのための手段にもこだわる側面を有する。いわば手段と目的との主観的な意味世界に照らした特殊な整合性を追求する行為であり、生産と消費の性格を持ち合わせた中間的な類型であるといえる。成就合理性とは本稿の造語であるが、手段志向という点に特徴がある行為類型である。この類型が消費行為の理念型としての消費固有の特殊な合理性を表している。ここでは目的の追求はすでに希薄化しており、名目上の目的の達成をむしろ延期する傾向性を帯びる。成就合理性とは、目的に至るまでの一定の行為連関の過程が成就されることへのこだわりである。それは手段それ自体の実行過程の審美性や完結性を追求することで、その成就に至るまでの充実した時間的推移に節度を保ちつつ没入するような行為である。目的志向を欠いた行為であるために、その成就のための合理性の規準は様式性の追求に置かれることとなる。この特殊な合理性の作用が、ある行為に消費的な性格を付与するのであり、遊戯や儀礼や社交などその他の成就的な性格をも同時に付与するのである。

5. 結論

消費行為それ自体の高度化を測るための基準の確立という目的のもとで、消費行為固有の構造や論理とは何かについて検討してきた。ここまでの議論において、様式性の追求と呼ぶことができる消費行為固有の構造が明らかになった。様式性の追求とは、まさに消費行為の理念型を形づくる根本的な論理のことであった。

その論理は、欲望の引きのばし、充実した時間の消耗、様式美を備えた行為連関の自発的制御という3つの特徴を消費行為に帯びさせることで、その洗練化や純粋化をもたらす。この消費行為としての純粋化の度合いをもって高度化の基準とすることの妥当性を明示することができたと考える。本稿ではまた、様式性の追求にこだわる行為が、成就合理性という特殊な合理性を志向する類型として合理的行為論の枠組みの中でより一般的な行為類型として理解できることも論証した。

注

- 1) 本稿ではコンサマトリー(*consummatory*)を「成就的」と表記する。コンサマトリーは他に、「自己充足的」「完結的」「完了的」などと訳されている。本稿が成就的の語を採用する理由は、次のような山崎の世阿弥論を踏まえていることによる。山崎は、世阿弥の演技論の中に行為論に関する鋭い洞察が示されている点を指摘した。それによると、世阿弥は理想の演技が備える行為の構造として序破急および落居からなる図式を提示したが、その構造が演技(行為)としての「成就」すなわち「成り就く」状態を自然にもたらすとしていたというのである(山崎 [1983]1988: 110-112)。この成就という思考は行為の自己充足性や完結性の問題を考える上で示唆に富む概念である。
- 2) 成就的行為が人びとに受動性と能動性ととの均衡という両義的態度を要請することは、シラーがすでに論じている(Schiller [1795]1847=[1972]2003: 86, 92)。なお、山崎はその両義的な態度を「没入と先の展望」(山崎 [1983]1988: 57)の姿勢の統一、「醒めながら酔ってある自我」という両義的な存在、「慣習の課題化と課題の再慣習化」(山崎 [2003]2006: 306)などと様々に言い換えて表現している。
- 3) 山崎は演技論の文脈において、模倣という概念を手がかりにして、行為(行動)の完結性の主題を以下のように論じている。「行動の完結性といふ点で、もし、現実の行動がそれをめざしながら妨げられてみるとすれば、それはその一点だけで行動として不完全な状態にある、と見なさなければならない。そして、模倣こそがその妨げを排除して、完結性の顕在化を援けるのだとすれば、模倣こそ現実行動の延長であり、そのより完成した姿だといへるだらう。模倣は、現実行動が未完で終わった地点でその仕事をひきつづぐのであり、逆にいへば、現実行動は模倣においてこそ、初めて真の現実行動になり得るのだ、と見ることができる。人間が模倣を行なふのは、現実行動がそれを見つからのために要求するからであって、ふたつの行動は異種の行動でありながら、じつはひとつの行動の連続にすぎないのだ、といひかへてもよい」(山崎 [1983]1988: 90-91)。
- 4) ホイジンガは遊びを次のように定義している。「遊びとは、あるはっきり定められた時間、空間の範囲内で行なわれる自発的な行為もしくは活動である。それは自発的に受け入れた規則に従っている。その規則はいったん受け入れられた以上は絶対的拘束力をもっている。遊びの目的は行為そのものなかにある。それは緊張と歓びの感情を伴い、またこれは『日常生活』とは、『別のもの』という意識に裏づけられている」(Huizinga [1938]1958=1973: 73)。他方、カイヨワはホイジンガの遊び概念を踏まえた上で、遊びの構成要素を競争(アゴン)・偶然(アレア)・模擬(ミミクリ)・眩暈(イリックス)という4つの基本的なカテゴリーに分類したことで有名である([1958]1967=[1971]1990: 43-45)。
- 5) 例として、C.L.モンテスキューやB.マンデヴィル、D.ヒューム、A.スミスなどの名を思い浮かべればよいであろう。社交が社会に秩序を形成する機能を持つことについては、18世紀の啓蒙の時代において、作法の洗練、私的利益と公共的利益との整合などの主題との関係で多様な議論が展開された。
- 6) 現代の消費(*consumption*)の語にはその起源として2つのラテン語表現があることをR.H.ウィリアムズは指摘する。1つは*consumere*であり、「使い尽くす」「消耗する」「浪費する」などの否定的な意味合いを持つ言葉である。もう1つは*consummare*であり、こちらは人間とモノとの積極的な関係性を示唆する言葉として、「総計する」「完成する」「成就する」といった意味を持つ(Williams 1982=1996: 12-13)。消費という語の語源からすれば、消費行為にはそもそも成就という意味合いが潜在的要素として含まれているともいえる。
- 7) 山崎は、西洋思想史に通底してきた消費に対する否定的な心性が結果として、消費にまつわる快楽主義や浪費などのイメージを過度に強調する弊害を反動的に生み出す源泉になった可能性を指摘している。「西洋の過度に厳しい倫理主義は、プラトンを始めとして、消費にたいする否定的な思想家の系譜を作りあげてきたが、それ以上に大きな問題は、むしろ、この倫理主義に反対するひとつとが、消費と快楽について過度の破壊的イメージを作りあげた、といふことだったかもしれない。…過激な快楽主義のイメージは、西洋において、消費の意味を正しく考へることを妨げた最大の原因だったといへるだらう」(山崎 [1984]1987: 230)。

- 8) G. リッツァは消費行為の完結性を消費社会の合理化の進展から導かれる帰結として捉えている。現代の消費空間は消費者を消費以外の活動から隔離することで余暇時間を消費に専念するように仕向ける装置であるとして、そうした消費空間のもとで行われる消費のことを「全備完結体験 (fully equipped blocks of time)」とリッツァは呼んでいる (Ritzer 2001: 186-187)。その典型例はクルーズ船の休暇旅行やカジノホテルなどである。ただし、消費空間の拡大が消費社会の高度化の一環であるとの認識はリッツァも共有している。
- 9) 生産と消費との相違が同一の構造を持つ行為間での漸層的な差異であるからこそ、消費社会という用語法が有意義な分析概念となる点を山崎は指摘する。「人間はすべての消費を生産の姿勢で営むこともでき、あらゆる生産を消費の姿勢で行なふこともできるのであって、さうであるからこそ、われわれは歴史上の社会を大別して、その全体を消費社会とか、生産優位の社会と呼ぶことが許されるのである」(山崎 [1984]1987: 168)。ダグラスらもまた、消費を社会的過程の総体に埋め戻し、生産と同様に社会的な必要という観点から捉え直すことの重要性を指摘している (Douglas and Isherwood 1979=1984: 2)。

文献

- Bataille, Georges, 1976, *La limite de l'utile, fragments*, In *Oeuvres complètes, tome 7*, Paris: Gallimard (=2003, 中山元訳『呪われた部分—有用性の限界』筑摩書房)。
- Caillois, Roger, [1958]1967, *Les Jeux et les hommes: Le masque et le vertige*, Paris: Gallimard (=1971]1990, 多田道太郎・塚崎幹夫訳『遊びと人間』講談社)。
- Douglas, Mary, [1966]2002, *Purity and Danger: An Analysis of Concepts of Pollution and Taboo* London and New York: Routledge (=1972]2009, 塚本利明訳『汚穢と禁忌』筑摩書房)。
- and Isherwood, Baron., 1979, *The World of Goods*, New York: Basic Books (=1984, 浅田彰・佐和隆光訳『儀礼としての消費—財と消費の経済人類学』新曜社)。
- Durkheim, Émile, 1912, *Les Formes Élémentaires de la Vie Religieuse: Le Système Totémique en Australie*, Paris: Librairie Félix Alcan=1941]1975, 古野清人訳『宗教生活の原初形態 (上・下)』岩波書店。
- Elias, Norbert, 1969, *Über den Prozess der Zivilisation*, 2 Bände, Bern: Francke Verlag (=1977-78, 赤井慧爾他訳『文明化の過程 (上・下)』法政大学出版局)。
- Gennep, Arnold, 1909, *Les Rites de Passage: Étude Systématique des Rites*, Paris: Librairie Critique (=1977]2012, 綾部恒雄・綾部裕子訳『通過儀礼』岩波書店)。
- Huizinga, Johan, [1938]1958, *Homo Ludens: Proeve eener bepaling van het Spel-Element der Cultuur*, Haarlem: Tjeenk Willink and Zoon (=1973, 高橋秀夫訳『ホモ・ルーデンス』中央公論新社)。
- Mauss, Marcel, 1925, "Essai sur le don: Forme et raison de l'échange dans les sociétés archaïques," *L'Année Sociologique*, nouvelle série 1, 30-186 (=2009, 吉田禎吾・江川純一訳『贈与論』筑摩書房)。
- Ritzer, George, 2001, *Explorations in the Sociology of Consumption: Fast Food, Credit Card and Casinos*, London, Sage Publications.
- Schiller, Friedrich, [1795]1847, "Über die ästhetische Erziehung des Menschen." In Schillers sämtliche Werke in 12 Bde.: Cottascher V. (=1972]2003, 小栗孝則訳『人間の美的教育について』法政大学出版局)。
- Simmel, Georg, 1917, *Grundfragen der Soziologie: Individuum und Gesellschaft*, Berlin and Leipzig, Walter de Gruyter (=1979, 清水幾太郎訳『社会学の根本問題—個人と社会』岩波書店)。
- Weber, Max, [1922]1972, "Soziologische Grundkategorien des Wirtschaftens," *Wirtschaft und Gesellschaft* 5 te, Tübingen: J.C.B.Mohr: 31-121 (=1979, 富永健一訳『経済行為の社会学的基礎範疇』『ウェーバー (世界の名著 81)』中央公論社: 295-484)。
- Williams, Rosalind H, 1982, *Dream Worlds: Mass Consumption in Late Nineteenth-Century France*, Berkeley: University of California Press (=1996, 吉田典子・田村真理訳『夢の消費革命』工作舎)。
- 山崎正和, [1983]1988, 『演技する精神』中央公論社。
- , [1984]1987, 『柔らかい個人主義の誕生—消費社会の美学』中央公論社。
- , [2003]2006, 『社交する人間—ホモ・ソシアビリス』中央公論新社。